尤韻唇音字の直音化と秦音的特徴

太田 斎

提要　原本《切韻》侯－尤兩套韻之間平聲明母只在三等，仄聲卻僅見於一等。河野六郎 1954 根據《廣韻》指出東三以及尤韻的去輕唇音化以及洪音化，並指出尤韻明母字的如此變化似乎是從仄聲開始的。值得注意的是類似情況亦可見於其他尤韻唇音聲母字，除了上聲以外，平、去聲的唇音字分布情況似乎呈現出一種不完整的互補關係。平山久雄 2018 也指出有的並母字和明母字一樣發生了去輕唇音化、洪音化。本文探討此類一等唇音反切到底是否是原来就存在的，並探討早期例外反切和《切韻》反切的關聯，推定《切韻》中也可能含有本用於三等被切字的一等下字反切。換言之，中古音系雖然確實存有一等唇音，也可能含有來自由於訛讀而產生的虛構字音。結論為一等唇音原都是三等韻字，從此可推知，在更早時期流攝一等唇音是系統上的空白。

キーワード　　例外反切　流摂　遇摂　直音化　秦音

0. 前言

本稿では説明の便のため、中古音以前の音韻についても、中古音の術語を用いる。慣例に従い、四声相配する上、去、入声は平声で代表させることがある。一韻中に複数の韻類が存在する場合、例えば東韻については三等韻を東三のように表記し、同様に四声相配する他声の三等韻を代表させる。推定音価は平山久雄 1967 の中古音推定音価を用いる。六朝期の音韻とは一致しないが、大雑把な音価の説明はこれでも可能である。但し齟齬を来す場合には適宜、必要な修正を加える。これとは別に上古から中古、現代にいたる大凡の変化を示すために超方言的表記を代用することもある。単母音の i,u,y,ɿ,ʅ（方言ならばこれに ɥ,ʮ も加わる）の処理に問題が残るが、概ね注音字母をローマナイズしたようなものと思ってもらえば良い。書名符号については中国語文献に《 》を用いることがある。この他、本文中でテキスト間の字句の異同に言及する場合には、『 』も《 》も用いず、ゴチックでテキスト名を示す。それにより、『広韻』など一部の書名の表示には不統一が生じている。

1. 慧琳音義に見える「秦音」

河野六郎 1954;1979:253 は慧琳『一切経音義』の反切を『広韻』反切と比較して、東韻三等及尤韻の明母の非軽唇音化を論じ、秦音ではこれが遇摂音となったと論じた。流摂三等については明母が平声尤韻、上声厚韻、去声候韻に分布しており、「恐らく平声の尤韻の状況が古く、上声・去声で侯韻相当韻にのみ現れるのは…… i̯ の喪失が上声・去声の場合に平声よりも早く行われていたのであらう」と述べ、更に侯韻唇音字には模韻に移ったものもあったと指摘する。これが『慧琳音義』にいう「秦音」の特徴であろう。以下が『慧琳音義』に現れる「秦音」の例の全てである。

無復　下**吳音**扶救反，**秦音**馮目反。27/4b(大乘基 音妙法蓮華經)

枹鼓　上音附牟反，亦音芳無反。並**秦音**。……。枹字**吳音**伏不反。不音福浮反。在尤字韻中。与浮同韻。訓釋惣同，音旨殊別，任隨鄉音。今且不取。84/8a

覆載　上敷務反。見《**韻英**》。**秦音**也。諸字書音為敷救反，**吳楚之音**也。1/10b

觜星　子移反。**吳音**醉唯反。**秦音**也。17/29a

捶打　下**吳音**頂，又都挺反。今取**秦音**得耿反。27. 14b(大乘基 音妙法蓮華經)

堆阜　下扶有反。**吳楚音**也。《**韻英**》云，音(<音云)扶武反。41/7b

堆阜　下扶久反。**吳楚之音**也。《**韻英**》云，音扶武反。12/18b

矛矟　上謨侯反。《**韻英**》音暮蒲反。14/24b

茂盛　上莫候反。**吳楚之音**也。《**韻英**》音為摸布反。草木茂盛也。4/6a

「呉楚」の音と対比して「秦音」と指摘される体系的特徴は専ら流摂に限られ、特に尤韻唇音が遇摂虞韻相当の字音となっていることである。最後の 2 例「矛，謨侯反。《**韻英**》音暮蒲反」、「茂，謨侯反。《**韻英**》音為摸布反」は反切を見ると侯韻唇音が遇摂侯韻相当の字音となっているかのようだが、帰字はそもそもそれぞれ尤韻、尤韻去声宥韻所属と考えられる[1]。他は個別的字音に関する言及で現れ、体系的特徴とは思えない。なお「秦音」と断ってはいないが、秦音系韻書とされる『韻英』の書名が現れる条目も『韻英』を「秦音」と同等と見做して挙げた。「覆載」の条から、『韻英』が「秦音」と等価と見做せることが分かる。但しこの他に「呉音」、「呉楚（之）音」、「江外音」などの注記はあるものの、「秦音」は現れない例があるが、これらは取り上げない。無表記の音注が「秦音」である可能性もあるが、「正音」、「俗音」という語が他に見え、「正音」:「呉音」と対比する例は皆無ではあるものの、その可能性が捨てきれないためである。

2. 流摂唇音字の所属に関する問題点

尤韻明母が脱軽唇音化に当たっては拗介音も失って一等侯韻明母と同音となる。平声では原本『切韻』侯韻に明母字は無い（『広韻』に増加小韻はある。）。一方、上声、去声は逆に一等韻に明母小韻は存在するが、三等有、宥韻には明母小韻は存在しない。河野氏は上、去声においても明母字は本来三等韻にあったものが、『切韻』において脱軽唇音化して一等韻相当の韻母になっていると考えておられる。ということは一等韻明母小韻は平上去声に亘り本来存在しなかったということになる。同様のことは他の幇、滂、並母についてもいえないであろうか。平山久雄 2018:68 は『敦煌毛詩音』で一部の字音にやはり脱軽唇音化が見られると指摘している。増加小韻を考慮の対象から除外して、原本『切韻』に存在する唇音小韻及びその所属字を対象にすると、

[1] 「茂」は『切韻』では侯韻所属であるが、『経典釈文』に「茂　字又作懋，亦作𢘑同。亡侯反」(408/3b11)とあり、4.帰字三等-下字一等の反切 の諸例に見るように、帰字が元三等であると解釈する余地がある。

平声一等侯韻に唇音字は存在しない。去声でも既に述べたように一等韻に明母があるのに対し、三等韻に明母字は無い。元三等韻であったものは一律一等韻になったと考えられる。そして一等韻の唇音は他には滂母小韻に見られる「仆」の１字のみで、三等韻にも敷母小韻があるので対立状況にあると言えるが、幇、並母は三等韻のみに現れ、一等韻は存在しない。それ故、滂母以外は相補分布を成している。ただ上声は一等韻唇音が全て存在している上に、幇、並母字が三等韻にも現れるから、相補分布を成していると言い難い上に、一等韻に現れる唇音字が小韻所属字が少ないとはいえ、恐らく当時にあっても使用頻度の低い字ではなさそうである。上声一等明母小韻もまた元三等韻であったとしても、幇/非、並/奉の対立状況について、果たして同様に一等唇音字が一律三等韻由来と見做せるかどうか、慎重な検討が必要なようである。

3. 原本『切韻』流摂唇音字

先ず李永富 1973 に基づき、原本『切韻』流摂唇音にどのような小韻と小韻所属字があるかを見てみよう。義注は省略。但し又音は残す。本稿筆者は原本『切韻』には又音表記はなかったと推測しているが、先行小学書に見える反切との用字の一致を確認したいためである。

平声

尤韻非母　不：甫鳩反。又甫救、甫九二反。一
侯韻幫母　　無し
尤韻敷母　𪀊：匹尤反。二　　秠又芳鄙反
侯韻滂母　　無し
尤韻奉母　浮：薄謀反。十七　　呼又拂謀反　桴　枹　淳　罦　琈　涪　粰　鴔　罘　鮒　烰　裒　鈇　芣　蜉
侯韻並母　　無し
尤韻明母　謀：莫浮反。十二　　蓩又莫貢反　眸　牟　侔　矛　鍪　斲　鴾　埋　蝥　蛑
侯韻明母　　無し

上声

有韻非母　缶：方久反。三　　𠯿　否又符鄙反
厚韻幫母　掊：方垢反。二　　捊
有韻敷母　　無し
厚韻滂母　剖：普厚反。三　　娝　蔀
有韻奉母　婦：房久反。七　　𡚴　負　萯　蜄　阜　鵂
厚韻並母　部：蒲口反。七　　嵵(=培)　犃　瓿　䓫　䜴　鄗
有韻明母　　無し
厚韻明母　母：莫厚反。六　　牡　某　拇　𠦂　莽又莫朗反

去声

宥韻非母　富：府副反。三　　輻　鍑

候韻幫母　　無し
宥韻敷母　副：敷救反。三　　  又匹力反　覆又敷福反
候韻滂母　仆：匹豆反。又扶北、撫遇二反。一
宥韻奉母　復：扶富反。又扶福反。二　　 
候韻並母　　無し
宥韻明母　　無し
候韻明母　茂：莫候反。八　　貿　戊　鄮　愗　  　袤　楙

該当小韻の有無を表にすると、以下のようになる。小韻代表字とその反切のみ記す。参考までに現代音を普通話拼音で附してある。所属字に代表字と異なる発音がある場合は「～」の後にその音を記し、欄外に実例を挙げた。但し現代にあって僻字に相当する場合は、反切から現代音を推測することになるので、敢えて拼音は附さずに空欄としてある。なお小韻代表字及びその小韻所属字の間に複数の字音が認められる場合、「～」で記してある。欄外注記が無いのは小韻代表字そのものに複数の字音があることを意味する。正統的反映は ou で、u と明母のみに見られる (m)ao は音素配列論的制約を忌避したことによる例外的変化の結果である。これについては太田斎 2023 で既に述べた。このうちの u が秦音型反映であるが、多くの字音がこれに属する状況は近世以降の変化に起因するものではない。『広韻』で流摂字に遇摂の又音が散見すること、『切韻』の遇摂所属字に同じ声符の字が混じっているのを見れば、中古音に早くもその一端が窺えることが分かる。

平声　侯－尤

明/(微)	並/奉	滂/敷	幫/非
謀：莫浮[①] móu~máo	浮：薄謀 fú~fóu	 ：匹尤	不：甫鳩 ×fõu

①“謀眸侔牟”móu；“矛蝥”máo

上声　厚－有

明/(微)	並/奉	滂/敷	幫/非
母：莫厚[②] mǔ~mǒu	部：蒲口 bù	剖：普厚 pǒu	掊：方垢
	婦：房久 fù		缶：方久 fõu

②“母畝” mǔ；“某”mǒu

去声　候－宥

明/(微)	並/奉	滂/敷	幫/非
茂：莫候 mào		仆：匹豆	
	復：扶富	副：敷救	富：府副

	fù	fù	fù

先ずは去声から論ずることにしよう。明母小韻代表字の「茂」には三等に該当する反切例が見られないが、小韻所属字の「貿」には

貿：徐亡救反。又音茂。……一音牟。　『経典釈文』172/22a3

という反切があり、徐邈が三等としていたことが知れる。興味深いことに原本『玉篇』と宋本『玉篇』の間で次のような反切用字の書き換えが見られる。

原本『玉篇』	**宋本『玉篇』**
貿：莫候反	貿：亡候切
戊：莫遘反	戊：亡寇切
蓩：妄候反	蓩：亡候切
――――――――――――――	
cf. 莪：亡豆反	莪：莫老切（不對應）
	蓩：莫候切
姆：妄媾反	姆：音茂　姆：同上。《說文》又莫后切
愁：妄遘反	愁：莫候切

音和切をわざわざ類隔切に改めたのは何故か？それは早期反切を参考にしたことによるのではないか？そうであれば「貿：亡候切」は「貿：莫候反」に対する復古的措置と言え、「亡救反」と等価にしようとする試みであったと解釈することができる。同じく明母小韻所属字の「戊：亡寇切」そして小韻代表字の「茂：亡候反」（注 1 で示した反切）など下字一等の反切についてもまた帰字はそもそも三等であったと見做し得る（類例は次節で紹介する）。上掲例のうち後の 3 例は逆に原本『玉篇』のほうがより古い用字によるもので、こちらの方が帰字が元三等であることを窺わせる。宋本『玉篇』の方がこれを既に直音化した帰字にふさわしい音和切に改めたものと考えられる。河野説の通り、去声候韻明母は恐らく全て本来三等宥韻であったであろう。となると一等は滂母のみということになる。

それではその去声滂母「仆：匹豆」について論ずることにしよう。この反切は一等侯韻所属で一等韻反切と見做されることに異論は無いようである。原本『切韻』ではこの字 1 字のみの小韻で、他に所属字は無い。本来帰字が三等韻であったと見做すなら、それが介音を失って直音化しているということになるが、果たして本当にそうか？上字は重唇音で、類隔切ではないが三等韻字であることに注意すべきと思われる。早期反切には反切上下字だけ見れば音和切であるが。帰字三等 - 下字一等というズレが見られる反切が存在するからである。もし「仆：匹豆」がそれらと同類であれば、帰字は三等と見做すことができる。この場合、軽唇音化以前の成立と考えられ

るので、尤韻の唇音は重唇音のままと考えてよいだろう。上掲の原本『切韻』の一等唇音反切では明瞭とは言い難いが、他文献に見える早期反切では三等韻上字が多く用いられている点が目を引く。上掲の上、去声明母反切にしても上字は一等韻「莫」であるが、河野が元三等韻所属であったとしている。そして平声三等韻の明母反切の上字もこれと同じ「莫」であることに注目すべきである。このような訳で、「仆：匹豆」の検討に入る前に、先ず帰字三等 - 下字一等というズレの実例を紹介することにしよう。

4. 帰字三等 - 下字一等の反切

ズレた反切については既に太田斎 2025 で紹介した。本節の挙例はそれと多くが重複するが、帰字三等 - 下字一等の異例反切の解釈には変化が生じている。まずは実例を挙げよう。最初の 2 例は周祖謨（1939;1957：10）の指摘する敦煌『文選音』の例である。「X 音～」という注音形式で、「反」の無い点からも古い時代の反切であることが窺われる。本稿では概ね「反」、「切」の表示を省略して反切例を示しているが、この『文選音』以外に原文に「反」も「切」も無い反切は取り上げていない。

1.重音直工　　“重”，通合三平鍾澄；“工”， 通合一平東見
2.炎音矣三　　“炎”，咸開三平鹽云；“三”， 咸開一平談心

以下は上田正（1986: 221）が指摘する原本『玉篇』（厳密には『篆隷万象名義』）所載例である。

3.楢：昌老　　小昌　　←陽昌 + 皓來　　cf.《廣韻》小韻 尺沼
4.將：即郎　　藥精開　←職精 + 唐來開　cf.《廣韻》陽韻 即良
5.約：於託　　藥影開　←魚影 + 鐸透開　cf.《廣韻》藥韻 於略
6.醃：於甘　　鹽日　　←魚影 + 談見　　cf.《廣韻》鹽韻 央炎

『經典釈文』所引徐邈反切にも以下のような例が見られる。

7.傅：方暮　　遇幫(非)　←陽幫(非) + 暮明
8.婉：於管　　阮影　　←魚影　+ 緩見

唐代初期のものを含めた早期反切では稀にこのような反切が見られる。4~6 は上下字だけを見れば、中古以降の反切でも見かけそうなものであるが、帰字はいずれも中古音で三等韻とされる。太田斎 2025 でこのような帰字 - 下字の等位のズレが見られる反切を江南読書音を反映する文献に集中するようだと指摘したが、原本『玉篇』にせよ敦煌出土の『文選音』にせよ古写本であり、後人の手が入らないまま今に伝わるものである点にも留意すべきである。『経典釈文』の 7-8.もこれと同類と考えてよかろう。上字が三等 C 類所属であることもまた注目すべきである。

坂井健一 1975:19 は「……徐邈が繼承した讀書音は，當然西晉時代のもの，即ち河南一帯におこなわれていた，いわゆる北學系統のもの」としており、この見解に従えば、徐邈の反映する音韻体系は江南読書音とは異なるということになる。

恐らく六朝期にはこのようなタイプの反切は珍しくなかったが、『切韻』の分韻が規範とされて以降は、その分韻の枠に従うように用字が改められた、つまりこのような反切の帰字は、通常韻書に収録されるに当たっては、下字の分類如何が判断基準となるが、収録の際には上字にも手が加えられ、上下字で等位が一致するように改められた。一等下字の場合には三等上字のままで改められなかったものもあろうが、上字もまた等位を揃えて一等韻に改められた。原本『玉篇』や『文選音』中のこのようなズレを見せる反切は、用字の改変を経ていない六朝期の早期反切の面影を残すものとも考えられるのである。これも太田 2025 で紹介した例であるが、『切韻』系韻書の中にさえも以下のような例が見られる。

1.恭 kɪoŋ 平 ： 駒 kʏuŏ 平　冬 toŋ 平 (ʏ=ɪ+u)（**冬韻所属**。王二、王三、P2014-1、P2015-1、P3798 ）
cf. 恭 kɪoŋ 平 ： 九 kɪ̆u 上　容 jɪoŋ 平　（鍾韻所属。廣韻）

2. 蜙 sɪoŋ 平 ： 先 sien 平　恭 kɪoŋ 平　（**冬韻所属**。切二、王二、王三、P2014-1、P2015-1）
cf. 蜙 sɪoŋ 平 ： 息 siə̆k 入　恭 kɪoŋ 平　（鍾韻所属。広韻）

3. 樅 tsʰɪoŋ 平 ： 七 tsʰiĕt 入　恭 kɪoŋ 平　（**冬韻所属**。切二、王二、P2014-1、P2015-1、P3798）
cf. 樅 tsʰɪoŋ 平 ： 七 tsʰiĕt 入　容 jɪoŋ 平　（**冬韻所属**。王三）
cf. 樅 tsʰɪoŋ 平 ： 七 tsʰiĕt 入　恭 kɪoŋ 平　（鍾韻所属。広韻）

4. 蛩 kʰɪoŋ 平 ： 曲 kʰɪok 入　恭 kɪoŋ 平　（増加小韻。**冬**、鍾韻両属。王二）
忎 kʰɪoŋ 平 ： 去 kʰɪə 去　弓 kɪoŋ 平　（増加小韻。**冬韻所属**。P2014-1、P2015-1）
cf. 蛩 kʰɪoŋ 平 ： 曲 kʰɪok 入　恭 kɪoŋ 平　（鍾韻所属。王二、広韻）

5. 蠓 pʰɪoŋ 平>fʰoŋ 平? ： 敷 pʰʏŏ 平> fʰo 平　隆 liə̆uŋ 平> lɪoŋ 平　（増加小韻。**冬韻所属**。王二）
cf. 豐 pʰɪoŋ 平>fʰoŋ 平? ： 敷 pʰʏŏ 平> fʰo 平　隆 liə̆uŋ 平> lɪoŋ 平（東三韻所属。切二、王二、王三。王二不收“蠓”）
cf. 豐 pʰɪoŋ 平>fʰoŋ 平? ： 孚 pʰʏŏ 平> fʰo 平　隆 liə̆uŋ 平> lɪoŋ 平（東三韻所属。刊(P2014-1)。收“蠓”）
cf. 豐 pʰɪoŋ 平>fʰoŋ 平? ： 敷 pʰʏŏ 平> fʰo 平　**空** kʰŏuŋ 平>kʰoŋ 平（東三韻所属。広韻）

6 謀 məu 平? ： 莫 mɑk 入　**侯** ɦəu 平　（尤韻所属。切三）
謀 mɪə̆u 平 ： 莫 mɑk 入　浮 bɪə̆u 平　（尤韻所属。王一、王二、王三、広韻）

7. 裒 bəu 平? ： 蒲 bo 平　溝 kəu 平　（増加小韻。**尤韻所属**。王三）

cf. 裒 bəu 平 ： 薄 bɑk 入　侯 ɦəu 平　（増加小韻。侯韻所属。広韻）
cf. 浮 bɪðu 平 ： 薄 bɑk 入　謀 mɪðu 平　（尤韻所属。切三、王一）
cf. 浮 bɪðu 平 ： 父 bʏð 上　謀 mɪðu 平　（尤韻所属。王二）
cf. 浮 bɪðu 平 ： 縛 bɪɑk 入　謀 mɪðu 平　（尤韻所属。王三、広韻）

8. 婦 bɪðu 上>vəu 上? ： 房 bɪɑŋ 平>vɑŋ 平? 不 pɪðu 上>fəu 上? （**厚韻所属**。王二）
婦 bɪðu 上 ： 房 bɪɑŋ 平 久 kɪðu 上 （有韻所属。王三、P3693、広韻）

9. 缶 pɪðu 上>fəu 上? ： 方 pɪɑŋ 平>fɑŋ 平? 負 bɪðu 上>vəu 上? （**厚韻所属**。王二）
缶 pɪðu 上 ： 方 pɪɑŋ 平 久 kɪðu 上 （有韻所属。切三、王一、王三、広韻）

10, 防 pɪɑŋ 去? ： 扶 bʏð 平 **浪** lɑŋ 去 (ʏ=ɪ+u)（増加小韻。漾韻所属。王三）
防 pɪɑŋ 去? ： 符 bʏð 平 **況** hʏɑŋ 去 (ʏ=ɪ+u)（増加小韻。漾韻所属。広韻）

11. cf. 韄pɪok 入 ： 封 pɪoŋ 平 曲 kʰɪok 入 （燭韻所属。切三、王一、王二、王三、唐、広）
cf. 韄pɪok 入>pok 入 ： 補 po 上 沃ʔok 入 （沃韻相当。今音。王一、王三）

1.は下字が一等冬韻所属なので、冬韻に収めたが、三等帰字の「恭」が常用字にして字音もまた反切に頼るまでもなく周知のものであったから、音和切に馴染んだ中古音を体現する知識人は反切のズレに容易に気づいたことであろう。そこで反切下字を三等に改め、『広韻』では鍾韻に所属を改めた[2]。『切韻』系韻書に見られるこのような処理の変容は恐らく六朝反切を下字に即してうっかり一等冬韻所属としたが、帰字が三等であることに気づき、下字を鍾韻所属字に改め、帰字の所属も変更したことを示している。2-4.は 1.で「恭」が冬韻所属と誤認されたことに起因し、冬韻所属とされたが、「恭」の扱いを見直したことで、これに連動して鍾韻所属に改められたもの。5.の王二の例は恐らく軽唇音化と東－冬の合流が関係している。「鄎」及び「蕫」は『切韻』系韻書他本では一様に東三滂母「豐」小韻中にあるが、王二はここに収録されていたこの 2 字を独立させて反切用字をそのままに前者を代表字とする一等冬韻の増加小韻とした。東一ではなく冬韻所属とされているのはどちらにも滂母小韻が無いことによる混乱も関与しているかもしれない。「蕫」に「又敷容反」とあり、「鄎」、「蕫」の一等相当の字音はこの又切を勘案し、下字「容」の属する鍾韻に対応する一等韻の冬韻に所属させるのが相応しいと判断したのかもしれないが、杜撰としか言いようがない措置である。何故「鄎」、「蕫」の 2 字だけが「豐」小韻中から取り出されたのかも不詳である。とりあえずはこの 2 字が他の同音字に先駆けて直音化した字音が代表性を獲得していたと考えておきたい。『広韻』では東韻所属で三等韻であるにも拘わらず、反切下字が一等「空」となっている。これも同じ原因に拠るものだろう。坂井健一

[2] 上字の改変の理由については不詳。「九」の使用例は「恭」及びこれと同音の字の反切では他に例が無い。『経典釈文』に「共 毛九勇反。……。鄭音恭」89/19b5 ;「共 毛音恭。……鄭音拱。……一云毛音拱」107/35a5 とある。これを利用したものか。下字の「容」は鍾韻下字としては多用されるものである。

1975 で見る限りでは六朝期の反切で「空」を使用している例は見かけないから、『切韻』系韻書最晩期の『広韻』が古い反切に改めたとは言えない。東韻には一等滂母小韻が無いので、かく改めても混乱は生じないとされたものか？とまれ**王二**、**広韻**の例は中古音以降の音韻変化を反映するものとして理解すべきである。6-10.は流摂の例。6.は**切三**が下字一等でありながら、尤韻所属としているのを『広韻』は帰字の所属を優先して下字を三等韻字に改めている。**切三**において元三等でありながら直音化していたものを反切では実際の字音を表示し、尤韻所属のままにしておくことで、本来の字音を示したとも考えられる。その場合、上字が介音をも担う反切、つまり帰字三等－下字一等の異例反切と見做すことになる。7.「裒」は原本『切韻』では尤韻並（奉）母「浮：薄謀」小韻所属字で、本来小韻代表字ではない。それが個別的に脱軽唇音化、直音化したことで、『広韻』では尤韻から取り除いて侯韻に移し増加小韻（代表字）としたものか。**王三**では尤韻並（奉）母「浮：縛謀」小韻に「裒　減。又蒲溝反」とあり、また尤韻韻末、侯韻冒頭の「侯：胡溝反」の直前に後人による書き込みと思われる「裒：蒲溝反」がある[3]。「浮：縛謀」小韻中の「裒　減。又蒲溝反」の又切を増加小韻扱いしたものらしい。侯韻韻末に空白があるのに敢えて尤韻韻末の僅かな空白に書き込んだのは侯韻ではなく侯韻尤韻の増加小韻と考えたからであろう。但しそれが誤解に拠る可能性もあるし、穿った見方をすれば、この書き込みが行われる時点の**王三**が我々の目にする**王三**とは異なっていて、その侯韻韻末には書き込む余白が全くなかった、そこで尤韻韻末、侯韻韻頭の余白を利用せざるを得なかった、今我々が見るこの書き込みはその字体をも真似たということも考えられないではない。しかしながら『切韻』の増補に当たって、増加小韻の反切は間々先行小学書の反切をそのまま襲う例が見られるから、或いは逆にこのような増加小韻の形で尤韻の古反切が保存されたとも考え得る。**切三**、**王三**の「浮：薄謀」は尤韻所属で、**切三**の「謀：莫侯」が尤韻所属でありながらも上字一等＋下字一等となっていることと合わせ考えれば、「薄謀」も同様に上字一等＋下字一等にして帰字一等と見做せる。しかしそれとは逆に、「浮：薄謀」は**王二**の「浮：父謀」、**王三**、**広韻**の「浮：縛謀」と等価と考えられるから、**王三**の尤韻所属の「裒：蒲溝」も上字一等＋下字一等ながらも同様に三等帰字反切とも見做せる。もちろんそもそもが何らかの三等韻上字であったものを後人が下字に合わせて一等韻字にしたということも考えられる。そうであれば「裒：蒲溝」は全くの古反切そのものを伝えるものではなくなるが、上字一等－下字一等の反切でも三等帰字を表すことがあり得るということになる。8-9.はどちらも上下字ともに三等韻（唇音）であるにも拘わらず、一等韻所属になっている。共に**王二**のみに見える扱いである。5.同様、軽唇音化による上下字の直音化により、一等韻扱いされたのではないかと考える。10.も軽唇音化が関係しているのであろう。漾韻所属のままにして、介音を失って直音化した字音を表すために下字を一等字に改めたと考える。11.に参考として挙げた「韄」の**王一**、**王三**に見える今音「補沃反」も中古音以降の脱軽唇音化、直音化を反映するものだろう。「封曲反」にわざわざ今音として注記するからには、古反切を引いたとは考えられない。

[3] 龍宇純 1968:249 は「裒：蒲溝反　四字字體与全書不類，盖後人據前文裒下又蒲溝反所增，此音屬侯韻」と述べる

上掲例は上田正 1975 に見える全てであるが、6-9 が流摂の例であり、それらがいずれも唇音字であることは注目に値する。これらの異例の成立要因には中古音以降の音韻変化によると思われるものも含まれるが、古反切に起因するものもまた含まれる。つまり音韻変化を反映したものもあれば、異例反切を誤読した結果が定着したというものもあろう。いずれについても、結果としては元は三等韻字でそれが直音扱いになっているということである。

序ながら従来、腫韻に寄韻されたとされる増加小韻の冬韻上声三等「湩：都隴」（端母一等）、「鵒：莫湩」（明母一等）も帰字三等として、前者は既にある腫韻「冢：知隴」（知母）小韻の増加字として、後者は腫韻明（微？）母三等として見做すべきものかもしれない。「鵒」については『経典釈文·爾雅音義下』に「《字林》云，鴘也。亡董反」とある（433/20b11）。簡啓賢 2003 は魏晉通語冬部一等相当とするが、この『字林』反切もまた上字三等＋下字一等にして帰字三等とも見做せるものである。『切韻』で四声相配する諸韻間でも上声合口を欠く例は少なくない。今平声の韻目を以て挙げるならば例えば、斉、皆、山、歌/戈、耕、蒸、登がそれに当たる。冬韻上声一等とされる増加小韻を腫韻と改めれば、冬韻もその一つと見做すことができる。

上掲例はいずれも同一摂内の一等―三等の通用と言えるような例だが、異例反切の許容範囲を**王三**などに見える韻目小注で確認することはできない。ただ『切韻』序に見える「先蘇前反仙相然反、尤于求反侯胡溝反俱論是切」はこの流摂の一、三等の韻母形式の主母音のズレと関係している可能性がある[4]。声母の違い（于母と匣母）を問題にしたとする説もあるが、本稿では一、三等の混用とする説に従う。「先仙」を心母で揃えて主母音の違いを際立たせたのと同様に、声母を同じに揃え（于母＝匣母)、韻母の違い（介音の有無）を際立たせたものと考えたい。

5. 去声滂（敷）母「仆：匹豆」

「仆」は原本『切韻』では候韻のこの音以外に偶韻滂母音（「赴：撫遇」小韻中）を収める。『広韻』のこの二小韻の反切はそれぞれ「仆：匹候」、「赴：芳遇」。『広韻』にはこの他に更に宥韻音の「副：敷救」、徳韻音の「覆：匹北」もあり、全部で 4 音を収める。宥韻音、徳韻音が見えるのは他には**唐韻**のみ。同一字に相互に関連が窺える流摂－遇摂の字音が見られる場合、遇摂音を秦音型反映と称するのに対し、流摂音を対比して便宜的に呉音型と呼んでおこう。宥韻音の増補は早期『切韻』テキストには見えないが、恐らく秦音型反映の偶韻滂母「撫遇」に呉音型反映として候韻の「匹豆」ではなく、宥韻滂母「敷救」が対応すると考えるべきものだろう。つまり原本『切韻』には収録されないが、「敷救」こそが「仆」の本来の字音を表すもので、「匹豆」は後発の反切であろうということである。ではこの「匹豆」は真に直音化を表すものなのであろうか。なお「豆」は呉、客、贛方言などに拗介音を持って現れることがある。例えば、吴江黎里镇 dieu[24]；吴江盛泽镇 diəu[212]；黄岩 diɤ[113]；金华 diɯu[213]/tiɯu[324]（錢乃榮 1992:126)、また寧化 tʰiəɯ[陽去]；寧都 tʰiu[陽去]；贛縣 tʰio[去]；弋陽 tʰiu[陽去]；南城 hiɛu[陽去]（李如龍 張雙慶 1992:71)。しかしそれを根拠に反切下字の「豆」が三等韻相当の音であったと考えるには及ばないだろう。本稿で帰字三等－下字一等と見做す例で現れる、異なる声母の「候」などの字にも同様の方音例が見られるが、

[4] 上田正 1975 校訂に依る。『広韻』では「～反」を「～切」とする。

やはり同様に三等韻相当の音とは考えない。

「仆：匹豆」に類した反切に『毛詩音』P3363「仆：芳豆」がある。同文献には類例として「覆：敷茂」も見える。平山久雄 1966:200 は帰字を宥韻所属とするが、平山久雄 2018:68 では「脱口蓋化」を生じていると見る。「匹豆」、「芳豆」はともに同じ音を表し、上掲の帰字―下字等位不一致の反切に属するものと見做して帰字は三等韻相当、つまり「敷救」と等価と考えるべきではないか。そうであれば原本『切韻』では三等韻帰字を表していた反切「仆：匹豆」を一等帰字を表すものと誤認して、候韻に所属させたということになる。「匹豆」という反切は蕭該『漢書音義』に「仆，《字林》疋豆反，又疋住反」(二十五史『前漢書』87 上 揚雄傳 693/2/17)とあるから、『切韻』の「仆：匹豆」は『字林』由来らしいことが知れる[5]。「疋」と「匹」の字体の違いは問題とせず、同一字として扱う。ここで簡啓賢 2003 に基づき、『字林』唇音反切に現れる上字の出現状況を見てみよう。帰字の等位を問わず、統計結果を見ると幇母上字は全 32 例で「方」が 20 例、「補」、「布」、「必」が各 2 例、「北」、「百」、「卑」、「毖」、「甫」、「夫」が各 1 例。滂母上字は全 22 例で「匹」が 20 例、「普」が 2 例で、他の字は見られない。後に挙げる徐邈と異なり、滂母上字に関して C 類字の使用例が皆無というのには何らかの音韻的な理由があるかもしれない。並母上字は全 18 例で「父」が 9 例、「蒲」が 3 例、「平」、「扶」が各 2 例、「毗」、「房」が各 1 例。明母上字は全 36 例で「亡」が 28 例、「莫」、「忙」が各 2 例、「茫」、「芒」、「忘」、「武」が各 1 例となっている。幇母では「方」、滂母では「匹」、並母では「父」、明母では「亡」が代表性を持っており、『字林』反切の滂母上字が全て重唇音字（軽唇音化を起こさない字）であるところが特異と言えるが[6]、そのほかの三母についてはやはり三等韻字特に C 類字が優勢である。「匹」は C 類字ではないが、三等韻字ではある。となると『字林』反切においてもまた帰字 - 下字のズレた反切が存在しており、「仆：匹豆」は上字が拗介音をも担うものとして、尤韻去声宥韻反切と解すべきだろう（pʰɪə̆u ←pʰiĕt + dəu）。つまり『字林』に見える「疋豆反」と「疋住反」を呉音型反映（宥韻）とそれに対応する秦音型反映（遇韻）の並列と見る。「仆：匹豆」に直音化を認めることも可能ではあるが、その場合でも「仆」は元三等相当と見做すことになる。上掲の原本『切韻』平声三等尤韻敷母小韻「飆：匹尤反」にもこの「匹」が見えることは注目すべきである。面白いことに、『経典釈文』にも「仆，普卜反，一音芳豆反，又音赴」（110/6a8）という例がある。なお対象としている流摂唇音字には曽、通摂の別音が散見する。それらの間の派生関係については今のところ定見を持たないので、この手の別音は本稿では議論の対象としない。

『経典釈文』では確認できないが、『漢書 57 上・司馬相如伝』の正文「弦矢分蓺殪仆」に附された注に「郭璞曰，仆，斃也。……仆音赴」(二十五史『前漢書』240/2/40)とあるから、「音赴」

---

[5] 但し原本『切韻』に『字林』引用を示す痕跡は無い。著者呂忱の弟呂静の『韻集』は五家韻書の一つである。『字林』ではなく『韻集』引用の結果である可能性もあるが、『韻集』佚文にはそれらしき反切は見当たらず、憶測の域を出ない。

[6] もし『字林』音系で軽唇音化が既に生じていたのなら、非－敷の区別が無い、或いはつき難いということで、ことさらに重唇音字が用いられたと解釈する余地があるが、簡啓賢 2003 で軽唇音化が見られないことが明らかにされている。或いは学統により反切用字の使用状況に差別化が図られていた可能性もあるか。但し今に残る佚文反切の用字がどこまで本来の様相を保っているか不明であり、後人による改変でその傾向が曖昧になっているであろうことも考慮せねばならない。

の方は郭璞音なのだろう。郭璞は河東聞喜の人である。すると『字林』の又反「疋住反」及び『切韻』の又反「撫遇反」と同じ音を表すから、これらの音注は秦音的反映を示していると考えられる。「疋住反」（pʰʏu←pʰiĕt + ʤʏu）[7]は恐らく遇摂韻母へと変化した秦音型反映である。「仆：匹豆」、「仆：芳豆」は下字一等であるが、帰字 - 下字不一致反切と見做して帰字尤韻とすれば両者を統一的に解釈できる。この反切が表す字音は pʰʷɪə̆u (pʰʏə̆u)で、呉音的反映である。今、開合の対立のない唇音声母の円唇性を故意に ʷ として析出させ、ʷɪ=uɪ=ʏ として pʰʏə̆u と表記しているのはこうした方が尤＞虞の変化を説明し易いからである。変化の過程は後に改めて説明する。たとえ誤認によって一等韻の音が定着することになっていたとしても、pʰʷɪə̆u> pʰ⁽ʷ⁾əu のような変化の結果と捉えることができる。本来が一等侯韻相当であるならば、これから三等虞韻への変化は説明が困難である。なお『字林』は秦音を反映する文献ではないが、秦音型反映の借用と見做すことができよう。つまり恐らく秦音型反映は字によっては六朝期に既にかなり他地域に浸透していた。

6.「芳豆反」は徐邈反切由来ではないか？

『經典釈文』所引徐邈音が見える注釈としては

踣，**徐**芳附反，（又）普豆反。《字林》云，……，李云，……，郭薄杯反。《莊子下》(397/16a11)、

踣，蒲北反，**徐**又敷豆反。《春秋左氏三》258/24b1

といった例がある。この他、徐邈の名は見えないが、以下のような例もある。

踣，蒲北反，又音赴，或孚豆、蒲侯反。《爾雅上中》(412/11b7)

踣，蒲北反，又敷豆反。《春秋左氏三》259/26a1

ここに挙がる「踣：芳附反」、「踣：普豆反」、「踣：敷豆反」が徐邈反切である。「踣」は『広韻』で「仆」の異体字として「仆」の直後に挙げられている字である。「仆：芳豆反」は上字「芳」が徐邈反切に多用されるから、これもまた徐邈由来である可能性が高い。蒋希文 1999 の挙げる徐邈反切の唇音字の出現状況を見ると、幇母上字全 71 例中、「甫」が 33 例、「方」が 24 例で、残りは「補」が 4 例現れる以外、「彼」、「邊」、「必」、「福」は各 1 例のみ。滂母上字では全 35 例中、「敷」18 例、「芳」10 例、「孚」7 例、そして「普」3 例、「匹」1 例となっている。並母上字は全 82 例中、「扶」が 64 例、「蒲」が 6 例で、「符」、「房」が各 3 例、「薄」、「步」が 2 例、「伏」、「父」が各 1 例といった状況である。幇母上字では「甫」、「方」、滂母上字では「敷」、次いで「芳」が代表性を持ち、並母上字では「扶」が他を圧して、僅かに「蒲」が混じるといった

[7] 虞韻の音価は平山久雄 2022 で yuŏ と改められた。恐らく虞韻は模韻三等相当であるから、一等模韻との間により強い音声的類似を求めたのであろう。尤韻＞虞韻の変化を説明するには旧説の方が都合が良い。

具合である。この他、明母は全 20 例中、「武」9 例、「莫」8 例、「亡」2 例、「無」1 例となっている。程度の差こそあれ、使用される上字は特定の字に集中することが見て取れよう。このことは下字についても言える。その一端については以下で紹介するところがある。今徐邈反切の用字に見られる特徴を二点挙げるならば、遇摂上字に偏ること、そして被切字の等位を問わず、三等韻上字（特に C 類）が多用される。但し明母の場合は一等字の現われる割合が比較的多いという点で、他の三母とは状況が異なる。

上に見る如く、「芳」は「敷」に次いで多用され、そして下字に関しても「豆」は候韻反切 14 例中、最多の 7 例が見られるので、『経典釈文』所引徐邈反切では存在を確認できないが、『切韻』の「仆：芳豆反」が徐邈由来である可能性は高い。もちろん後人の手で用字が改められたという可能性も考慮する必要がある。「踣：普豆反」は「踣：敷豆反」と等価であるならば、誰かが上字を下字の等位に合わせて一等字に改めたものであるとの推測が可能である。『経典釈文』中の音注は陸徳明の手が加わっているであろうし、今に伝わる『経典釈文』がどれほど原本に忠実かという問題もある。それにより誤差が生じるが、上記の出現頻度から徐邈の反切用字の嗜好は見て取ることができよう。ちなみに先に挙げた『毛詩音』P3363「覆：敷茂」も徐邈反切由来の可能性が無いではない。蒋希文 1999 に拠れば、現存徐邈反切で「茂」は反切下字としての用例は見られないようであるが、直音例には見られるから（5 例中 4 例）、今に伝わらない徐邈反切には「茂」を下字とするものもあったかもしれない。注意すべきは帰字「覆」は『集韻』に 5 音収録されるが、重唇音は徳韻「匹北切」のみ。徳韻反切との混同に起因するのでなければ、そして直音化した字音がかつて存在したが、規範音に入ることなく淘汰されて今に伝わらない、ということでなければ、「覆：敷茂」もまた帰字三等 - 下字一等の異例反切の一つということになる。

関連事例として『新撰字鏡』所引『玉篇』の「趩，蒲北、孚豆二反。僵也。踣字，弊也」（pp.525-526）が挙げられる。□部分は原文で欠けているが、『篆隷万象名義』に「趩，孚豆反。僵也。弊也。陪(>掊)、踣」とあるのに依って補った[8]。「趩」は「踣」とともに『集韻』では「仆」の異体字とされる。『切韻』「又扶北、撫遇二反」の「扶北」もまた上に紹介した徐邈反切の唇音上字使用例からみて。徐邈由来であろう。「孚豆反」の方も上に示したように徐邈反切の滂母上字としては「孚」は「敷」、「芳」に次いで多く現れ、また候韻下字中、使用例最多の「豆」が用いられているところから見て、「芳豆反」、「敷豆反」と共に徐邈反切であろう[9]。恐らく「芳豆反」同様、帰字 - 下字のズレたもので、これで呉音的反映 pʰɪǒu を表している。なお「踣：**徐**芳附反」とある遇韻音の方は、これが本来の姿を留めるものならば、徐邈音の中にも秦音型が混入していたことを意味する。

この掲出字は切韻系韻書の中では**王二**、**唐韻**及び**広韻**に見られ、前二者では「趩」、**広韻**では「趩」に作る。**王二**では「赴：撫遇」、**唐韻**、**広韻**では「赴：芳遇」小韻中にある[10]。「**徐**敷豆反」

[8] 末尾の「陪(>掊)、踣」は異体字注記で「或作陪(>掊)、踣」とあるべきところ。
[9] 但し直後に『字林』の書名が見える。「普」は上字としては僅か 2 例ながらも、『字林』にも表れる。そして下字「豆」も他に 1 例現れる。それ故「普豆反」を『字林』由来と見做す余地も無いではない。その場合も一等上字の使用が後人の書き換えによるものである可能性は残る。
[10] **唐韻**は上字「芳」を「方」に誤る。

と「徐芳附反」について蒋希文 1999 は前者を侯韻相当、後者を虞韻相当として処理しているが（pp.76-78）、先の『字林』反切同様、呉音的反映 pʰʷɪðu (pʰʏðu)と秦音的反映 pʰʏu の二種と見るべきだろう。つまり前者「徐敷豆反」も帰字 - 下字の等位が一致しない反切ということになる。そして「普豆反」は一見、音和切だが、「踣，徐芳附反，(又)普豆反。《字林》云，…」を徐邈反切の二音併記と見做せば、徐邈反切「芳豆反」、「敷豆反」、「孚豆反」のいずれかであったものを後人が一等反切上字に代えた、ということだろう。つまり「普豆反」は既に指摘した如く、「芳豆反」、「敷豆反」、「孚豆反」と用字不同の異切で、後人によって下字に等位を合わせるべく上字が書き換えられた結果、三(C)＋一ではなく、一＋一の組み合わせで三等帰字を表すことになっているということである。そうであればこの一＋一は必ずしも直音化を反映するものではない。その具体例は太田斎 2025:51 に挙げた。徐邈反切にせよ、『字林』反切にせよ、三等帰字に一等韻上字の使用は希少である。恐らくは両者において反切上字は三等韻字を専ら使用し、帰字三等韻字の場合でも同摂内の一等韻字を下字に用いて三等韻帰字を表すことが間々あった[11]。そうなると三等＋一等の反切の帰字が果たして一等なのか、三等なのか曖昧になり、注音方法としての反切は今だ不完全と言わざるを得ない。後者の成立条件が如何なるものか、遺憾ながら今詳らかにすることはできない。或いは反切は創成期にあってはなお曖昧な音注方法であったが、『切韻』の登場を俟って初めて厳密なものになったということかも知れない。この推測と些か矛盾することになるが、三等韻字は他の等の韻に比べ、声母 - 韻母の結合制約が緩く、端組（「地」の一字を除く）以外の全ての声母と組み合わせることが可能である。それ故上字として汎用性があり、徐邈や『字林』においては上字に相応しいものとされたのではないか。穿った見方をすれば、そのような三等韻字のグループには「字母」の概念に連なるような悉曇学（等韻学）的配慮が働いているかも知れない。いわゆる「助紐字」が三等及び四等の字で統一されていることとも関連がありそうに思われる。

このズレた反切の多くは後人によって下字に即して上字を一等韻字に改め、「音和切」とされ、三等韻反切から一等韻反切へと変身したが、特に常用字ではない帰字との整合性については十分な配慮が為されなかった。一＋一の組み合わせで帰字が三等韻の反切はそのような経過を経たものだろう。音韻変化により脱軽唇音化、直音化して一等韻相当になったことを示すために一等韻上字を用いたという可能性ももちろんあるが、それ以外にこのような反切用字の改変により、帰字が一等韻字と誤認され、それが後代に伝わったという可能性も考慮すべきである。筆者の推測を述べるならば、徐邈反切は本来「敷豆反」、「孚豆反」そして恐らく「芳豆反」の三者であって、「普豆反」は後人が上字を下字に合わせ、一等字の「普」に改めたということである。繰り返しになるが「仆：匹豆」もまた『字林』由来の帰字 - 下字の等位が一致しない反切（三等重紐韻 A

[11] 太田斎 2025 で取り上げた『字林』反切「移：上*djiɑŋ 上泥*ne 平」(*dji-+*-e→*djie)も三四等の合流と見ずに、同様に扱って三＋四→三と見做す余地がある。三＋一→三と共に上字が介音を担う反切として統一的に解釈できるが、ご都合主義の推定音価を平山久雄 2022 の中古音推定音価に置き換えると斉韻は ɛi で上字が介音を担うものとして内転系の支韻は iɛi、外転系の斉韻 ɛi と主母音、韻尾が同じと見做すことになる。『字林』反切が主母音に関し厳密に処理しているものならば、ここに六朝期の支韻主母音の音価を認めることができるが、中古音で説明するには無理がある。なお簡啓賢 2003 は支部に韻尾-i を認めている。三＋四→三と見做すには『字林』音系の再構音を以て説明せねばならないだろう。

＋一等）であって、帰字は本来 pʰɪðu と解釈できる。介音は一先ず ɪ と表記しておく。唇音が有する円唇性を ʷ で表すならば、遇摂音は pʰʷɪðu (pʰʏðu) > pʰʏu (=赴) のように秦音的反映へと変化したものだろう。pʰʏu は主母音 ð の脱落が生じたと考える。結局、去声一等幫、滂、並三母は全て空き間と見做せる。

7. 上声一等幫母「掊：方垢」

既に紹介したように唇音反切上字の使用例に関して『字林』反切と徐邈反切では用字の選択がかなり異なっている。しかし幫母反切上字については、「方」は『字林』、徐邈いずれにおいても使用例が多い。簡啓賢 2003 に拠れば、『字林』に下字「垢」の使用例は認められない。蒋希文 1999 に拠れば、徐邈反切だと「垢」が 3 例、「苟」、「母」が各 1 例で、「垢」は「掊：方垢」が 3 例、「掊：甫垢」が 1 例現れており、前者の反切上下字は本節の上声一等厚韻幫母「掊」のそれと一致する。この帰字の出典は『説文解字』と思われる。釈文「衣裳撃(也)」は『説文』に一致する。大徐本は『唐韻』の「方苟切」を挙げる。段注は「方口切。三部。“方”字類隔，當作“彼”」という（『説文解字注』十二篇上 52a,p.615 上)。段玉裁は「方苟切」ではなく「方口切」を挙げて、類隔切につき軽唇音の上字「方」は重唇音の「彼」に改めるべきと言っているのであるが、「方口切」は由来不詳。重唇音字についても何故ことさらに「彼」が選ばれたのか分明ではない。「方苟切」は『集韻』に見る「彼口切」のように改めるべきということで、『集韻』反切の上字を『唐韻』反切の上字「方」に暫時取り換え、「方口」＞「彼口」のように改めるべきと主張しているのかもしれない。但しここで『集韻』についての言及は無い。しかし類隔説以外に、「方苟切」を太田斎 2025 で指摘したような拗音帰字に洪音下字を用いた反切と解釈する余地もある。

「掊」に「方垢」の反切を当てた例は他に見ないが、この小韻のもう一つの所属字「掊」については、『経典釈文』に「掊：普口反，徐方垢反」（経典釈文 367/15b4; 389/33a10）とある。二つの反切は声母が異なる。前者は滂母、後者は幫（非）母で別音と見做さざるを得ない。後者が「芳」であれば、ともに滂母で、本稿筆者の臆説では同音と見做す余地があるのだが、別に「蒲侯反，徐又甫垢反」があり、こちらは前者が並母平声で後者が幫母上声である。『慧琳音義』に見える有韻幫母反切に「缶：甫苟」、「缶：甫狗」、「缶：孚苟」、「缶：孚苟」（滂母)、「缶：浮苟」(並母)、「缶：孚苟」、「缶：方苟」、「缶：不狗」、「缶：府苟」、「缶：夫苟」といった下字一等字の例が見られる。『慧琳音義』は 907 年成書とされ、『字林』、徐邈よりかなり時代は下る。それ故、直音化を示す例とも解釈できるが、様々な先行小学書の引用が見られ、これらもそれらに由来するとするならば、「方苟」と「方垢」は同音、つまり共に有韻所属と見ることもできる。「普口反」との関係は明らかにし得ないが、「掊：方垢」もまた実は三等韻帰字の反切と見做すことができる。上下字の一致から見て、この反切は徐邈由来と考えても良かろう。徐邈反切に下字「口」の用例は見られない。一方、『字林』には「髑偶：五口」という例がある。現存する徐邈反切にせよ、『字林』反切にせよ現存する反切は少数であり、推測には危うさが伴うが、陸志韋 1963；377 は『字林』反切の特徴として上下字に筆画の少ない字が用いられる傾向を指摘している。ならば、段注の「方口」は図らずも『字林』反切を復元したことになり、『経典釈文』の

「普口」は後人がその上字を一等字に改めたとする推測の余地も生ずる。

8. 上声一等滂母「剖：普厚」

三等滂母の方は空き間となっており、一等：三等の対立は無い。「剖」の反切上字に三等韻字を用いた例は見当たらない。『切韻』系韻書のなかでは『広韻』にしか見当たらないが、遇摂麌韻「撫：芳武」にも表れる。この又音は有韻滂母の「剖」に対応する秦音型反映と思われる。そうであれば由来は三等有韻相当ということになろう。なお『慧苑音義』に「剖：潘補」(下26a10/851)とあるのもまた秦音型反映であろうが、麌韻相当となった後に直音化したのか、先に尤＞侯と直音化した後に遇摂音化したのか、さもなくばこれで麌韻相当の帰字の字音を表したのか、三様の可能性がある。但し「補」が「甫」の誤りと見る余地もあるが、今採らない。いずれにせよこれらの音が一つの字音に由来するならば、統一的に解釈するには、元が尤韻相当と見做すのが至当であろう。

上掲の原本『切韻』「剖：普厚」小韻所属字の中では「婄」について、原本『玉篇』に「妨走反」がある。この小韻もまた三等韻の音を表していると見做すことも可能である。ただ下字「厚」は『字林』、徐邈に用例が見られず、坂井健一 1975 に拠る限り、『経典釈文』の他の音注家にも用例が見られないし、原本『玉篇』でも使用例皆無である。『切韻』でも明母反切で用いられる 1 例しかない。但し『玄応音義』、『慧琳音義』には散見する。この他、管見の及ぶ限りでは『毛詩音』残巻（S2729 に 2 例「牡：莫厚」、「笱：古厚」; P3383 に 2 例「耇：工厚」、「垢：剛厚」）、『俗務要名林』（1 例「剖：普厚」）に見える。恐らく上字「普」については『字林』、徐邈のいずれにも僅かながら用例が見られるが、恐らく「剖：普厚」は下字が一等であることから、『字林』、徐邈或いはその他の手になる六朝期の何らかの三等韻上字であった反切を後人が改めた結果とは言い難い。つまり下字「厚」もまた後人の手が加わっているということになるが、本来が何らかの上字三等 - 下字一等にして帰字三等という構成の反切であったと推定するには難があると言わざるを得ない。これは直音化を反映する反切と見るのが自然なようである。『切韻』編者の独創もしくは別の文献にルーツを持つと推定することになるが、『俗務要名林』の例は『切韻』と共通の先行文献に依拠したものというのでなければ、成書年代から考えて『切韻』に依拠したと見るべきであろう。

9. 上声一等並母「部：蒲口」

一等並母「部：蒲口」は三等「婦：房久」と対立を成している。『經典釈文』に「部：蒲口反，徐扶苟反」とあり、ここに併記されている二種の反切は別音ではなく、反切用字の違いを示していると見る余地がある。その場合、「扶苟反」は通常の理解に基づけば、類隔の一等韻反切とされる。徐邈反切は既に指摘した如く、帰字の等位に拘わらず三等韻上字を使用することが多いが、時代的にもこの上字「扶」は軽唇音化を表しているとは考えられない。帰字「部」は当時にあっても常用字でその字音も反切に頼らずとも自明のものであったろうが、現代方音で一様に一等相当で現れる字音はいずれも「蒲口反/切」ではなく遇摂音化した「裴古反/切」に対応するものかもしれない。但しこの「部」の遇摂音は『切韻』韻系韻書の中で、**王一**、**王三**、**広韻**では「簿：

裴古」小韻中に見えるが[12]、**切三**、**王二**には収録されないので、原本『切韻』には存在しなかったと推定される。この遇摂音が正しく秦音型反映であるならば、それに対応する呉音型反映の流摂音もまた一等韻相当ということになり、拗音的特徴は窺えない。これまでの推論をここで敷衍するならば、「部：扶苟反」は帰字三等の異例反切で、「部：蒲口反」はその上字を一等字に改めたものということになるが、ならば遇摂音は何故、三等麌韻所属相当となっていないのか、説明がつかない。管見の及ぶ限りで、厚韻並母帰字反切に三等韻上字を使用した例は、徐邈の「部：扶苟反」以外、例を見ないのである。このことは尤韻唇音の直音化が他声に先駆けて上声で起こったことを物語るのであろうか。この小韻については一先ず、本来が三等韻であったにしても中古音では直音化していたと考えざるを得ないようである。但し丁鋒 2017:66 に拠れば『華厳伝音義』に「負：樸(<横)補」という例があり、「樸」は『慧琳音義』でも上字としての用例を見ないものであるが、前節で滂母の例として挙げた『慧苑音義』「剖：潘補」そして『俗務要名林』に見える明母「畝(畝)：莫補」と似た構成の反切と見做すことができる。この他、上田正 1984:188 も明母例として、母　麻杲云，美詁反。古《切韻》用吳音作莫厚反(《妙法蓮花經釋文》上《大正藏》58/145 下)；拇　“拇指” 上謨譜反。《韻英》云，拇，手指大指也(《慧琳音義》41/50)を挙げる[13]。帰字が一等か三等かをさておき、いずれも流摂字で、下字が遇摂一等、秦音型反映を表す反切である。今丁鋒 2017 の校訂が正しいという前提で論を進めたい。反切上下字に即して考えれば、これらの反切は全て直音と見做さざるを得ないのであるが、明母反切帰字がいずれも一等厚韻所属であるのと異なり、「負」は『集韻』でさえも有韻奉母の一音しか収録していない。「負：樸補」で示される遇摂姥韻相当音は後に淘汰されて現代に伝わらなかったと考えるのが普通であろうが、直音反切を以て三等麌韻帰字を表していると見做す余地も無いではない。『華厳伝音義』は『慧琳音義』に似て、異調同音上字式反切を多用する。帰字上声麌韻並（奉）母相当にして異調同音上字式反切であれば上字に平声「扶：附夫」(『広韻』は「扶：防無」)若しくは去声「附：符遇」の所属字が期待されるところで、そうではなく一等上字を使用しているということは帰字が一等である証左となる。しかし帰字が遇摂の場合、上字に遇摂字を多用する『切韻』式（＝徐邈式）の反切でも結果的に異調同音上字式反切と同じ上下字の組み合わせになる。『華厳伝音義』の反切はまた『切韻』反切と一致するものも多く、『切韻』を利用した可能性は高いので、そのようなタイプと解釈することに無理は無い。無理筋に近い推論であるが、もし元が徐邈反切であるならば、並母上字は「扶」が代表性を有していたから、「扶苟」で有韻相当帰字を表していたのと同様に「*扶補」で三等麌韻相当帰字を表した、それが後人によって下字が一等韻であるところから、上字が一等模韻並母の「樸」に変えられた、とも考え得る。反切の誤読に起因するかどうかはさておき、「部」については*bʷɪǎu(*bʏǎu) > bəu ；秦音型反映では*bʷɪǎu(*bʏǎu)> b(ʷ)əu > b(ʷ)ə > b(ʷ)o 若しくは*bʷɪǎu(*bʏǎu) > bʏu (> bʏǒ) >bo のような変化を辿ったものと推定しておく[14]。先に直音化して侯韻相当となった後に遇摂音化したか、尤韻相当であっ

[12] 反切用字に異同無し。
[13] 後者については希麟音義 1 /21 にほぼ同内容の記載が見えることが指摘されている。異調同音上字式反切の直後に《韻英》という書名が現れることは興味深い。
[14] 後者を説明するには平山久雄 2022 の改定案の方が都合が良い。

たものが虞韻相当となった後に直音化したか、これについても滂母の「剖」同様に二様の推定が可能である。

憶測を更に進めるならば、「部：蒲口反」もまた陸徳明若しくは六朝期の何者かが三等韻上字を一等上字に改めた反切で、本来「扶苟反」と同じく尤韻帰字を表す反切であったが、この改定により侯韻反切になってしまったとも考え得る。それが音韻変化によるものか、反切の誤読による字音の改変かどちらでもあり得るが、いずれにせよ反切は結果として直音化を反映するものとなっている。強引な推論であるが、より具体的に言うならば、「口」は下字としては『字林』反切に 2 例、用例がある。後述のように「蒲」も上字として 3 例見られるが、残りの 9 例は全て「父」である。「蒲口反」はそもそもが『字林』反切で「父口反」とされ、帰字「部」は三等であったが、下字一等につき、帰字もまた一等扱いされ、更に上字も一等字「蒲」に代えて『経典釈文』に収めたということではないか。但し既に述べたように厚韻並母帰字反切に三等韻上字を使用した例は徐邈の反切以外には無く、「父口反」の実在を文献で確認することはできない。

例外反切は流摂に集中するかの印象があるが、これは先に指摘した如く、『切韻』序の「尤于求反侯胡溝反俱論是切」と関連するのではないか？現代方言でも客贛方言で侯韻牙喉音に拗介音が現れたり、逆に尤韻字が洪音化している例が見られる（《汉语方言字汇》（第二版重排本）pp.204-222）。北方でも散発的ながら「猴」、「瘊」が拗音化したり、「牛」、「就」、「休」が洪音化したりしている[15]。

山西太原：吃猴虫儿 $ts^hə?^2$ $xiəu^{11}$ $tsuŋ^{11}$ $ɚ^{11}$　螳螂 297
四川西充：蝛(>猴)子 $ɕiəu^{31}$ $tsɿ^{42}$　螳螂 51[16]
　　cf. 后啄子 $ɕiəu^{44}$ $tsua^{33}$ $tsɿ^{42}$　后脑勺 51
湖北安陆：修(>猴)子 $ɕiəu^{44}$ $tsɿ^2$　螳螂 研(2007) 59
湖北黄陂：疢(>瘊)子 $ɕiou^{33}$ $tsɿ^0$　①瘊子；②螳螂 研究 135
————————————
河南获嘉：“就~是他”tsou[13](去)、“休~走”xou[33](阴平)、“牛~肉”ou[31](阳平)　贺巍 1989，pp.90-91
河南内黄：“休”xou[24](阴平)、“牛”ou[42](阳平)　李学军 2016，p.38；
　　“逗(>就)”tou[312](去)~ tou[0](轻)　李学军 2016，p.236-237
河北昌黎：“就~是，~去”tsou[55](去)、“休(?)~走，不要走”xou[32](阴平)　pp.75-76[17]
河北唐山曹妃甸：“就~来”tsou[453](去)、“口(>休)不要”xou[32](阴平)　沈丹萍 2021，pp.61
山西河津：“休不要：~走”xəu[31](阴平)、“牛”ŋəu[324](阳平)　史秀菊 2004，p.132
陕西韩城：“牛”ŋɤu[35](阳平)　秋谷裕幸等 2016，p.40

[15] 挙例中には湖北方言の他、四川方言も含む。これらを含め、一先ず「北方」と称しておく。
[16] 《西充方言》，张星智著 李仲华编，西充县人民政府地方志办公室，1998.8，393p.の p.93 では掲出語を「猴子」とする。音声表記が拼音に一部 IPA を交えたもので、正確さで劣るので用いなかった。なお同書の p.22 には「猴」、「后」を含め、侯韻牙喉音字に拗介音が現れる例が列挙されているが、今は省略する。
[17] 「休(?)」の (?) は原文にある通り。削除して良い。

“休 1 莫，别[①]”χɤu[31](阴平)　　秋谷裕幸等 2016，p.40 ①很少用

勿論、それぞれの方言内部の史的変化の結果である可能性も十分にあるが、このような「混乱」は中古音、更には六朝期に淵源があるかもしれないとの想定も可能である。そうであるならば、流摂唇音で上字三等－下字一等のみならず、上字一等－下字一等の場合までも帰字三等と解する余地がある反切が存在することもまた、この「混乱」と合わせ解釈すべきものかもしれない。このような例外反切下字に現れる一等字の実際の音価が三等相当のものだったとは考えないが、中古以前から方音でこのような「混乱」があったならば、流摂の例外反切を的確に判断して『切韻』の三等尤韻に収録することは他摂に比べより困難であったろう。先に言及した『切韻』序に見える「先－仙」についての解釈との整合性はなおも検討する必要があるが、「尤－侯」についての「論是切」という記述はこのような例外反切が関与した帰属の判断の「混乱」が問題になっているのではないかと考える。

結局のところ、厳密な証明には至らないが、以上の考察で見えてきたことは、流摂一等唇音は本来体系的な空き間で、六朝期以降に三等韻から生まれるようになった可能性が高いということである。今、両唇音を P で、合口要素を w で示せば、流摂一等相当の Pʷəu もまた三等の Pʷɪəu(Pʏəu)同様に実例は多くない。出亙りとはいえ外転系に比べ短弱とされる内転系主母音の前後に円唇要素が同時に現れるのはなおも忌避される傾向にあると思われる。主母音三等から拗介音を失って一等相当になってもなお音素配列論的制約からは自由ではないということだろう。このような状況は古来一貫して存在していたものと思われる。なお北方方言では唇音字に顕著に見られるが、南方に目を転ずると呉方言では唇音に限らず遇摂音化していたり、粤方言や閩方言でやはり唇音に限らず外転化していたり、それぞれの自律的な音韻変化の結果であろうが、əu,iəu のような音連続は好まれない傾向があるようである。具体例は『汉语方音字汇(第二版重印本)』pp.202-222 を参照して頂くことにして、ここでは具体例の紹介はしない。たとえ反切の誤読の結果であれ、中古音では確かに流摂一等唇音の存在を認めない訳にはいかない。流摂の中古音推定音価 əu,ɪəu は大方の認めるところであろう。しかし中古にあってもこの音連続が好まれない傾向はあったのではないか。だからこそ現代方音に様々な異なった反映が見られるのではないか。上古音においては一先ず流摂唇音一等は空き間と見做した方が良さそうに思われる。

なお明母三等の脱軽唇音化は東三でも見られた。通摂でも増加小韻を排除して、原本『切韻』に基づき一等－三等間の唇音の出現状況を見ると、東一入－東三入以外は対立するところが少なく、特に冬－鍾などは相補分布を成しているかのように見える。通摂の唇音一等字についても流摂同様の状況と解釈できるものか、検討してみる価値はあろう。これについてはいつか別稿で論じることにしたい。

＜参考文献＞

テキスト

《說文解字注》　許慎，段玉裁注，經韻樓本，藝文印書館影印, 1974，877+1+100p.

《漢書》　　二十五史 1《史記・前漢書》，上海古籍出版社 上海書店影印，1986，前漢書

365-769 頁
《經典釋文》　鄧仕樑 黃坤堯《新校索引 經典釋文》，學海出版社，(上)共 439 頁;(下)索引 共 589 頁
《玄應音義》　［清］莊炘 錢坫 孫星衍同校 附刻《華嚴經音義》［唐］釋慧苑撰，［清］臧庸節錄，同治八年仁和曹氏重刊本，新文豐出版公司影印，1980，pp.1-800
《慧苑音義》 同上，pp.801-868
《慧琳音義》　東國大學校 1976《高麗大藏經》第 42(共 1071 頁)、43 冊(共 1007 頁)
《廣韻》　張士俊重刊澤存堂本，1967，臺灣藝文印書館影印 (原周祖謨 1951《廣韻校本》，商務印書館，線裝 5 冊，1951)
《十韻彙編》 劉復等，線裝 4 冊，國立北京大學出版組，1936；臺灣 學生書局，洋裝一冊，1963.10 影印一版
『篆隸萬象名義』　高山寺古辞書資料第一（高山寺資料叢書第六冊），1977，高山寺典籍文書綜合調査團，東京大學出版会，700+1p.
『新撰字鏡』　天治本 新撰字鏡（增訂版），1967;1992，京都大学文学部国語学国文学研究室，臨川書店，889p.

方言资料

北京大学中国语言文学系语言学教研室 2003《汉语方音字汇(第二版重印本)》，语文出版社，共 375+33 页，北京
李如龍 張雙慶主編 1992《客贛方言調查報告》，廈門大學出版社，共 518 頁
錢乃榮 1992《當代吳語研究》，上海教育出版社，共 1121 頁
河北昌黎:《昌黎方言志》，河北省昌黎县县志编纂委员会·中国科学院语言研究所，科学出版社，1960，共 283 頁
唐山曹妃甸:《唐山曹妃甸方言研究》(河北方言研究丛书)，沈丹萍，中华书局，2021，共 275 頁
河南获嘉:《获嘉方言研究》，贺巍，商务印书馆，1989.10，共 267 頁
内黄:《河南内黄方言研究》， 李学军，中国社会科学出版社， 2016， 共 265 頁
湖北安陆:《安陆方言研究》，盛银花，湖北长江集团·湖北人民出版社，2007，共 269 頁
黄陂:《黄陂方言研究》(湖北方言研究丛书) ，黄树先，华中师范大学出版社，2021，共 506 頁
山西河津:《河津方言研究》(山西方言重点研究丛书(第二辑)) ，史秀菊，山西人民出版社，2004，共 409 頁
太原：太原方言词汇，温端政，《方言》1981-4，295-316 頁
陕西韩城:《韩城方言调查研究》(陕西方言重点调查研究)，秋谷裕幸 徐朋彪，中华书局，2016，共 445 頁
四川西充:《西充县志 • 方言》(送审稿)，冯登泰(特约)，编委会，1991, 共 54 頁

日本語（著者アイウエオ順）

上田正 1976『切韻諸本反切総覧』，均社，222p.，京都

上田正 1984『切韻逸文の研究』，汲古書院，529p.，東京

上田正 1986『玉篇反切総覧』，自家版，563p.，神戸

上田正 1987『慧琳反切総覧』，汲古書院，254+1p.，東京

大島正二 1981『唐代字音の研究』，汲古書院，364+資料 759p.；索引 758p.，東京

太田斎 2025 杼韻、海韻三等認定に関わる例外反切，『雲渓』，京都

河野六郎 1954 唐代長安音に於ける微母について，東京教育大学『中国文化研究会会報』4-1，pp.28-39；後、『河野六郎著作集２』，平凡社，1979，pp.249-259，東京

慶谷壽信 1978「俗務要名林」反切聲韻考，東京都立大学人文学部『人文学報』128，pp.1-62

坂井健一 1975『魏晉南北朝字音研究』，汲古書院，398+299p.，東京

平山久雄 1966 敦煌毛詩音残巻の研究（上），北海道大學『文學部紀要』，pp.3-243

平山久雄 1967 中古漢語の音韻，牛島徳次等編『中国文化叢書 1　言語』，大修館書店，東京，pp.112-166（音韻論第３章）

平山久雄 2022『中古音講義』, 汲古書院, 272p.

水谷眞成 1956 慧苑音義雜攷—資料の分析—，『支那學報』（大谷大學）創刊號，pp.145-221；『中國語史研究—中国語學とインド學の接点—』，1994，三省堂，pp.94-162

中国語（著者ピンイン順）

丁鋒 2017 東渡唐僧道璿及其《華嚴傳音義》研究，《語學教育フォーラム》第 32 號，大東文化大學，pp. 21-156 頁，東京

简启贤 2003《〈字林〉音注研究》，巴蜀书社，共 374 页，成都

蔣希文 1999《徐邈音切研究》，貴州教育出版社，共 315 页，貴陽

李永富 1973《切韻輯斠》藝文印書館，線装 8 冊，台北

龍宇純 1968《唐寫全本王仁昫補缺切韻校箋》，香港中文大學，93+725+書影 3+抄本 3+唐蘭跋 6 頁

陸志韋 1963 古反切是怎樣構造的，《中國語文》第 5 期(總第 126 期)，349-385 頁

平山久雄 2018《敦煌〈毛詩音〉音韻研究》，中國語學研究 單刊 No.17，好文出版，310 頁，東京

太田齋 2023 東三尤韻明母之我見，《神戸外大論叢》76，107-135 頁

周祖謨 1939 論文選音殘卷之作者及其方音，《輔仁學誌》，113-125 頁；《漢語音韻論文集》，商務印書館，1957，9-17 頁